



燕石襍志

弓伍

15
1492
5



45
1492
5

養石雜誌巻五之上冊

江戸

養笠軒

瀧澤解瑣吉述



一 俗児方

蜂ハチはしつと痛堪イタミタヘやうとれ門邊カドバある小石コイシの半マハ土ツチ中ナカより出デると
 擡オキエ起キし上ウよりしめとをコをマしス蕉モトの如ニく伏フセむキその痛イタミ忽タまニ去ル解トク毒ドク犬イヌの蠟ロウ
 傷キズられルるハとれトとれト氷コをシ汲クて傷キズられルるハ処トコロをシ浸シめルゆハハハ蠟ロウ汁ジツをシ漬ケ
 そのまマ瘻キスの上ウに灸キウしス急シヤカに蠟カマ蟻マトウ湯ユをシ用モチふハべシり活イキるハぐハ蠟カマ蟻マ
 を捕トラふハその股ムネの肉ニクを食クふハぬハ救コウめス速スヤカに大オホ狗イヌ犬イヌのイまニムカ禽キ獸ノ怒イカ
 とれトハハ必カナラ毒ドクのりニ猫ネコ鼠ネズミ鶏トリの類タガもモとれトとれトとれト毛モウをシ捕トらスべシぐハ牡オス雞トリの闘トウハ
 るハもモとれトとれトとれトをシうシべシぐハ尙モト傷キズらスるハらレばハ毒ドク狗イヌ犬イヌと異ヒナなニん
 但タ犬イヌ毒ドクをシ蝮ハハしスとれトとれトとれト瘻キス浅アサく痛イタ深フカくハんハとハ由リ療リヤウ治チ等トウ肉ニク多オホれハ
 その毒ドク昔ムカシ月ツキにシ至ツキて再マタ發ハツし終マタに命イナヒをシ墮オチしスのハありハ或シハ狂キヤウ乱ランしス物モノ鳴ナと

早稲田大学 図書館
35.2.1 35
蔵書

あつきののりつれその毒熾るるを怪しむ思ひし縦は神薬を用ゐ
とも赤小豆を忌こと年ほち毒なれば毒の發すこと初は倍く救ひし
あるが主あつた由生人をもんまはるる人を嚙傷るありされら速く打殺
しその害を除去せし婦人の情をりしれを憐むべしとて大衆の
畜生を愛し人々を害するところを主人の徳を傷ふより東海道岡部
驛より十八九町あるところの田舎に大除の符をぬきあつたその名を
忘る身ぬぐり **解蛇毒** 蝮蛇に傷られし腹痛し乾柿を嚼碎しその
痰ぬぐり毒氣忽ち消散し愈究めし救なり哉前より救賢人の心
秋田藩を以その中の蝮蛇をあり毎日さらしに嚼傷らるるを
刈者熟く怖れど白柿を搦潰し麻油をくくると器中に藏らるるを腰
着痛を多びく蝮を刈果し後又纏るる毒を附れし毒を多し消散
しあつたの比及びその平愈しとて亦辺属に戸ある人の救難神薬し



蛇を吞たりしよその蛇腹中より一糸の苦痛酷しと云ふも
救う最後は白柿數十枚を水薬し五六碗を腹に置かれし毒を
水海に逐し毒をぬぐりしとて草あつた妙なるもの白柿を貯け
避穢鼠 穢鼠の小鼠を其に鼠の
鼠を食ふは盡るる至れども不痛くの鼠を人よりかあ後よそのを
是を食ふられを潔くしとて而計すれども功あるれとれ方あるの系凡そ
その人の取たる四方を引續ししとれを枕方と置はるの鼠亦あること
あつた春秋定公十有五年春王正月穢鼠食鄭牛を死改ト牛又平家物
猪は平相國の馬の尾は鼠を食ふとて治鵜 鵜を患るりの節合の
門に挿たる鵜の尻を霜とてその痛む歯へ樹られし即愈亦此法なり
發燧木の表裏へ丸のく数箇字を題し紙をくこれを封じ家の柱
へ貼し上齒痛まらざる國中へ釘を打下齒痛まらざる國中へ釘を

杖の節の痛随て散どり痛止むるに杖の節を焼く
 杖の節の痛随て散どり痛止むるに杖の節を焼く

○ ○ 蛇及蝮蝎

三毒臭風毒
 心徳腫毒
 腎経炎廻心



上包へこの蛇を
 書かす

釘のわらうらなを用人鏡の洗ひ浄むべし凡貼ると二三十日齒の痛全く去
 り後發の河へ入るが人の足は俗兎といふも予往て試するに驗あり又並子を煮
 して齒の虫をとる方あり亦家方ありがく齧の患を除ぐにあられたる
 あり人よ授けし養齒方 蛤の肉を去その一隻の貝へ塩をばせ
 亦一隻への飯をつめ合たり火中へ投て焼果て後搗出き搗碎れ毎朝こ
 ろりてり齒を磨きそく口熱を去る老後齒の脱ると稀なり蛤
 の節を潰るとらいた竹の節をそくとらいた五六才を截とり筒の中へ塩を

見筒らも焼く 搗碎れたるも亦翠実をとりて塩を搗き和と
 すると松葉塩とりあうれども蛤の切竹と松とを撈りて○齒の弱年
 自愛して予著述の書より予年甲子に齒二枚を脱らるるの脱
 本俗に糸切齒と云ふりのより予もむられり予時好く以て其を齧碎れ或は
 縁或は糸齒の後其隨て牙を用ひて予年甲子に齒二枚を脱らるるの脱
 予年甲子に予著述の書より予年甲子に齒二枚を脱らるるの脱
 弱年の蔽るる葉餅の效驗あり患のたより老後の艱生の弱年の時
 より終り自記して予年甲子に齒二枚を脱らるるの脱
 予年甲子に予著述の書より予年甲子に齒二枚を脱らるるの脱
 糊を和されを附とすより利芽を授けられたる高坂弾正のたより
 試す柱に釘をうららに試す件の茶を塗るは一宿をゆれば釘の成
 成許出るといふ予年甲子に試す 治火傷 湯火に傷られたるは胡椒の水をり

此の毒を数回さらしその痛を止むに去る愈く迹ほらば又緑瓦の水も效あり時
 卯を又兎の籠樹王如未授吾行持北方壬癸禁火大法龍樹王如未也
 是北方壬癸水斬除天下火星辰必降急急如律令と兎畢ふも眞武印
 を握りしを吹れ冷水少許をぬ洗くば火より足を焼くとも瘡を
 見す種 **水弱急濟** 夏月水に或はく弱人にとどろを扶けける時や
 胡瓦を切しゆび描盒をく搗碎れ固めその人の鳩尾へ押當布りて
 その上をさると結ひよめ逆さるゆいより腹中よめる水を悉く吐くやわてら
 り臥さるる藁の火より煖まら即治 **抱瘡洗湯** 小児の抱瘡を
 月の入浴と入れ茶湯 桃枝一本 フトサニナ竹ホトシハ 桑枝一本 フトサ同上 陳皮 四反 綠豆 四反
 黑豆 三反 枳殼 四反 牛蒡子 四反 紅花 四反 右水三升入一升は煎りつれ
 小児に浴せらるる究めく瘡瘻ゆら瘡の流行とれ度と浴せられぬ必效あり
解魚毒 以土真麩の類その毒に當られらるる推草を水煎れ腹を
 此の毒を解すの毒酷くかざるるに黒砂糖を嘗るも效あり肝脈をあらは
 するの蘆根を水煎りて用じその毒を解亦右麩を霜とく腹を
 效あり或は槐花末を水調り或は龍腦水或は至宝丹或は撒櫃子とれ
 單まへ凡前芥子の風薬を腹に汗脈を食へば即死 **治病舟者** 舟
 乗り沈頭で醒さるりの大魚の胃中より魚の骨を化せり小魚を
 煮き腹をあらはし即效あり凡水行をせりりの已とせり病を
 中へ先潮を掬て嗽れ少許これを飲かその病を○遠行するのま
 大着を焼く足底双熨とらるるあくると数回されが趾の皮堅くある
 道をゆくは足痛と又草鞋に傷らるるは亦高涼が俗事より防風 細
 辛 草烏 一升用 右細末とくく鞋底草履に糝水をしりこれに
 遠行するは又脚痛とらるる **避煙** 火災あるりの羅蔔をばらり
 走らば煙は咽ど亦火燭より煙は咽く花より中 羅蔔の

此の毒を数回さらしその痛を止むに去る愈く迹ほらば又緑瓦の水も效あり時
 卯を又兎の籠樹王如未授吾行持北方壬癸禁火大法龍樹王如未也
 是北方壬癸水斬除天下火星辰必降急急如律令と兎畢ふも眞武印
 を握りしを吹れ冷水少許をぬ洗くば火より足を焼くとも瘡を
 見す種 **水弱急濟** 夏月水に或はく弱人にとどろを扶けける時や
 胡瓦を切しゆび描盒をく搗碎れ固めその人の鳩尾へ押當布りて
 その上をさると結ひよめ逆さるゆいより腹中よめる水を悉く吐くやわてら
 り臥さるる藁の火より煖まら即治 **抱瘡洗湯** 小児の抱瘡を
 月の入浴と入れ茶湯 桃枝一本 フトサニナ竹ホトシハ 桑枝一本 フトサ同上 陳皮 四反 綠豆 四反
 黑豆 三反 枳殼 四反 牛蒡子 四反 紅花 四反 右水三升入一升は煎りつれ
 小児に浴せらるる究めく瘡瘻ゆら瘡の流行とれ度と浴せられぬ必效あり
解魚毒 以土真麩の類その毒に當られらるる推草を水煎れ腹を
 此の毒を解すの毒酷くかざるるに黒砂糖を嘗るも效あり肝脈をあらは
 するの蘆根を水煎りて用じその毒を解亦右麩を霜とく腹を
 效あり或は槐花末を水調り或は龍腦水或は至宝丹或は撒櫃子とれ
 單まへ凡前芥子の風薬を腹に汗脈を食へば即死 **治病舟者** 舟
 乗り沈頭で醒さるりの大魚の胃中より魚の骨を化せり小魚を
 煮き腹をあらはし即效あり凡水行をせりりの已とせり病を
 中へ先潮を掬て嗽れ少許これを飲かその病を○遠行するのま
 大着を焼く足底双熨とらるるあくると数回されが趾の皮堅くある
 道をゆくは足痛と又草鞋に傷らるるは亦高涼が俗事より防風 細
 辛 草烏 一升用 右細末とくく鞋底草履に糝水をしりこれに
 遠行するは又脚痛とらるる **避煙** 火災あるりの羅蔔をばらり
 走らば煙は咽ど亦火燭より煙は咽く花より中 羅蔔の

汁を只そぐり入れれば、甦生せし中、山に柳子に股脚隨筆よりえたり○
平野歳よりふりあう折言く、夏の日、火を滅せしと又例よりうらうら二月
新平の茶を禁んされば、おの生も、四十餘年の今、さうのうらうら當定よ
過ど望偶然なる故、さうの不測の幸、さうの昔、さうのの、勉、發、燧の燧、
煙草の吹かろうとを足り、滅せしと○鄰里に失火、さうの類
焼せられや、不やをあらん、先づ主人の脈を診、さうの災、脱れぬと、
主人の脈、絶たうが、却と一老人、さうのさう、あらん、飲○主、さう、入、毎、夜、臥、居、よ
からん、さう、さう、あ、さう、を、巡、さう、火、の、用、心、せ、よ、戸、鎖、を、固、め、さう、さう、さう、の、
力、さう、満、り、失、火、あり、又、盗、人、入、ら、ぬ、と、あ、り、さう、さう、あ、れ、さう、さう、さう、の、
り、又、毎、歳、節、分、の、夜、大、歳、の、夜、正、月、六、日、十、四、日、夜、西、時、に、井、水、を、汲、て、清
淨、なる、磁、器、に、盛、り、これ、を、一、滴、も、溢、さ、さう、さう、の、電、神、に、供、し、て、明、朝、卯、時、に、
竈、の、井、に、返、し、さう、さう、さう、の、氣、失、た、さう、さう、さう、の、忘、る、さう、さう、
辨木虱 三月、
相、供、たる、蛤、を、樹、の、枝、に、お、り、さう、さう、の、本、木、虱、毛、虫、生、じ、
殺羽虱 鶏、
虱、の、生、たる、より、前、後、**防風**、**草烏頭**、**水煎**、
浴、せ、ら、れ、さう、さう、の、氣、を、去、る、○、人、家、常、に、**鱧**、を、焼、き、諸、虫、を、避、
蠅、る、さう、さう、の、**治病猫**、禽、獸、の、病、を、癒、さ、さう、さう、の、病、を、癒、さ、
の、食、み、さう、さう、の、猫、の、瘦、れ、必、吐、さう、さう、の、病、を、癒、さ、
亦、鳥、藥、水、を、収、灌、さう、さう、の、時、除、け、さう、さう、の、凡、猫、の、鐵、を、忌、め、の、
和、と、餌、と、常、に、鐵、大、箸、を、さう、さう、の、猫、瘦、る、**命短**、
栽、り、たる、樹、の、半、枯、れ、さう、さう、の、活、か、さう、さう、の、樹、を、挿、き、土、を、
曝、せ、と、一、日、さう、さう、の、根、を、瀧、の、中、に、浸、せ、と、一、布、を、
更、治、六、七、月、の、う、最、驗、あり、**除金魚虱**、**金魚**、の、瘦、る、身、に、白、帶、あり、
さう、さう、の、久、し、さう、さう、の、
さう、さう、の、晒、**糞**、を、洗、ひ、さう、さう、の、生、貴、へ、さう、さう、の、
金、魚、を、

汁を只そぐり入れれば、甦生せし中、山に柳子に股脚隨筆よりえたり○
平野歳よりふりあう折言く、夏の日、火を滅せしと又例よりうらうら二月
新平の茶を禁んされば、おの生も、四十餘年の今、さうのうらうら當定よ
過ど望偶然なる故、さうの不測の幸、さうの昔、さうのの、勉、發、燧の燧、
煙草の吹かろうとを足り、滅せしと○鄰里に失火、さうの類
焼せられや、不やをあらん、先づ主人の脈を診、さうの災、脱れぬと、
主人の脈、絶たうが、却と一老人、さうのさう、あらん、飲○主、さう、入、毎、夜、臥、居、よ
からん、さう、さう、あ、さう、を、巡、さう、火、の、用、心、せ、よ、戸、鎖、を、固、め、さう、さう、さう、の、
力、さう、満、り、失、火、あり、又、盗、人、入、ら、ぬ、と、あ、り、さう、さう、あ、れ、さう、さう、さう、の、
り、又、毎、歳、節、分、の、夜、大、歳、の、夜、正、月、六、日、十、四、日、夜、西、時、に、井、水、を、汲、て、清
淨、なる、磁、器、に、盛、り、これ、を、一、滴、も、溢、さ、さう、さう、の、電、神、に、供、し、て、明、朝、卯、時、に、
竈、の、井、に、返、し、さう、さう、さう、の、氣、失、た、さう、さう、さう、の、忘、る、さう、さう、
辨木虱 三月、
相、供、たる、蛤、を、樹、の、枝、に、お、り、さう、さう、の、本、木、虱、毛、虫、生、じ、
殺羽虱 鶏、
虱、の、生、たる、より、前、後、**防風**、**草烏頭**、**水煎**、
浴、せ、ら、れ、さう、さう、の、氣、を、去、る、○、人、家、常、に、**鱧**、を、焼、き、諸、虫、を、避、
蠅、る、さう、さう、の、**治病猫**、禽、獸、の、病、を、癒、さ、さう、さう、の、病、を、癒、さ、
の、食、み、さう、さう、の、猫、の、瘦、れ、必、吐、さう、さう、の、病、を、癒、さ、
亦、鳥、藥、水、を、収、灌、さう、さう、の、時、除、け、さう、さう、の、凡、猫、の、鐵、を、忌、め、の、
和、と、餌、と、常、に、鐵、大、箸、を、さう、さう、の、猫、瘦、る、**命短**、
栽、り、たる、樹、の、半、枯、れ、さう、さう、の、活、か、さう、さう、の、樹、を、挿、き、土、を、
曝、せ、と、一、日、さう、さう、の、根、を、瀧、の、中、に、浸、せ、と、一、布、を、
更、治、六、七、月、の、う、最、驗、あり、**除金魚虱**、**金魚**、の、瘦、る、身、に、白、帶、あり、
さう、さう、の、久、し、さう、さう、の、
さう、さう、の、晒、**糞**、を、洗、ひ、さう、さう、の、生、貴、へ、さう、さう、の、
金、魚、を、

妙法られぬ秘苑要術よりんるるる **治病鳥** 鷄鳩とんく小鳥の糞つらして

相らるるしん 形よりよりよりよりよりよりよりよりよりよりよりよりよりよりより

朝ふらふらその鳥砂石を天と糞とれれば即活 **修書** 書籍の破りて蟲たる

と後補ふ或ハ編糝糊或ハ生麩糊をすりすりすれバ物よりびそのみよりり

破損ちあふ倍と只海羅を用ふべし海羅よりすれバ白更生とん

白更の多く微雨の時節は生と四月のよりぬき書を晒し箱よりぬきぬ

晴成ふらぬ微雨中の風よりぬきぬが白更なり又寒中より書を晒し箱よりぬきぬ

ぬき暑中より書を晒しぬきぬその冷さを候ふ箱よりぬきぬが却白更を生

除油汚書 怪し冊子より油を洗ぬぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬり

一紙の裏よりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬり

油をぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬり

とぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬり

方より海漂蟻 滑石 各二龍骨 一分 白堊 一分 芥子細末より紙をすりて汚る

を鬚法のよりすりすなり大凡油の汚るとまぬ時水よりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬり

緩乾く薬を用るも亦可 **取錯字** 書をぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬり

去らんとるらば蔓荊子 二枚 龍骨 一枚 桐子霜 五分 定粉 五分 右ありぬりぬり

とるらば水よりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬり

讀書燈 香油一升より油二両をぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬり

中より塩を置ぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬり

ぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬり

神呪 辰戌戌酉陽雜俎 載主夜神呪曰 婆珊婆演底

持之 夜行及寐可却恐怖惡夢云 李石 續博志 底

作帝 又唐雍益堅神呪一志曰 華嚴經之 言曰 善哉 善哉

子 參善知識 至 觸摩 摩竭 提國 迦毗 羅城 見主夜神

子 參善知識 至 觸摩 摩竭 提國 迦毗 羅城 見主夜神

曰。婆珊婆演底。然則其神。神一神也。亦續神。咒志有。惡夢。
 咒。曰。太素真人。避惡夢法。一曰。魄。二曰。心。試。三曰。
 尸。賊。此乃。厭落之方也。以左手。捻人。一。二。七。過。叩齒。
 二。七。通。微。祝。曰。大洞真。長練。二。魂。第一。魂。速。守。七。
 魄。第一。魂。速。守。泥丸。第二。魂。受。心。節。度。速。啓。太。素。三。
 元。君。向。遇。不。祥。之。夢。是。七。魂。遊。尸。來。協。邪。源。急。石。桃。
 康。護。命。上。告。帝。君。五。老。九。真。各。守。體。門。黃。闕。神。師。紫。
 戶。軍。把。鉞。握。鈴。消。滅。惡。精。返。函。成。吉。生。死。無。緣。畢。
 若。又。臥。必。獲。吉。應。亦。拾。砂。載。夢。誦。曰。惡。夢。著。草。
 木。吉。夢。成。寶。王。到。桑。樹。下。說。又。云。南。無。功。德。須。彌。嚴。王。
 如。末。反。已。上。向。東。灑。水。誦。之。云。唐。國。ノ。ノ。ニ。夕。夕。ニ。鳴。鹿。モ
 半。カ。エ。ラ。ス。レ。バ。ユ。ル。サ。レ。ニ。ケ。リ。吉。夢。誦。曰。福。德。增。長。須。彌。功。德。神。

變。王。如。來。又。云。南。無。成。就。須。弥。功。德。王。如。末。治。此。

陰。小。兒。怪。子。蚯蚓。小。使。を。あ。ら。れ。忽。々。の。氣。ふ。吹。れ。る。塵。葉。腫。り。
 心。の。く。その。く。れ。何。れ。も。あ。れ。蚯蚓。を。掘。り。う。く。洗。ひ。く。鶩。の。如。く。埋。れ。
 即。愈。避。執。真。鳥。を。獲。り。夜。行。を。お。發。燧。を。真。蓋。の。中。に。納。べ。り。

二 因之怪

狸の異名を野猫と云ふ。猫の異名を家狸と云ふ。狸を類々。田の荒
 を捕らねば。多奴。然。田怪。又。田猫。うん。和名。鼓。云。兼。名。瓦。云。狸。
 音。置。和。名。搏。鳥。為。粮。者。也。と。云。を。狸。對。せ。り。と。その。故。の。故。の。故。の。

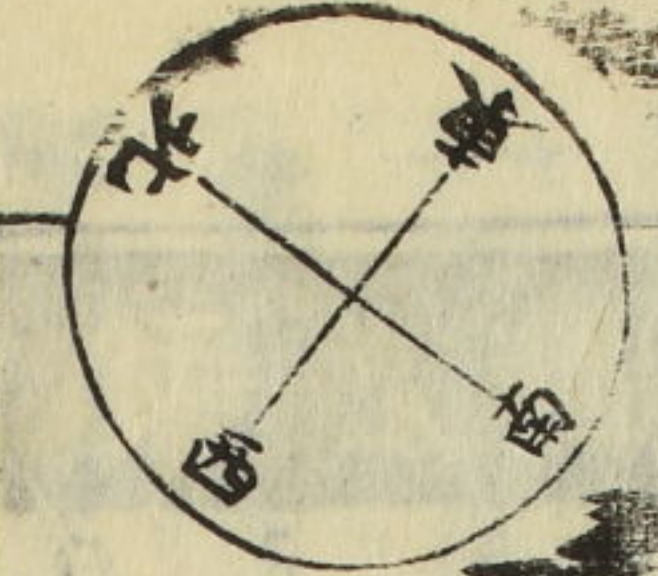
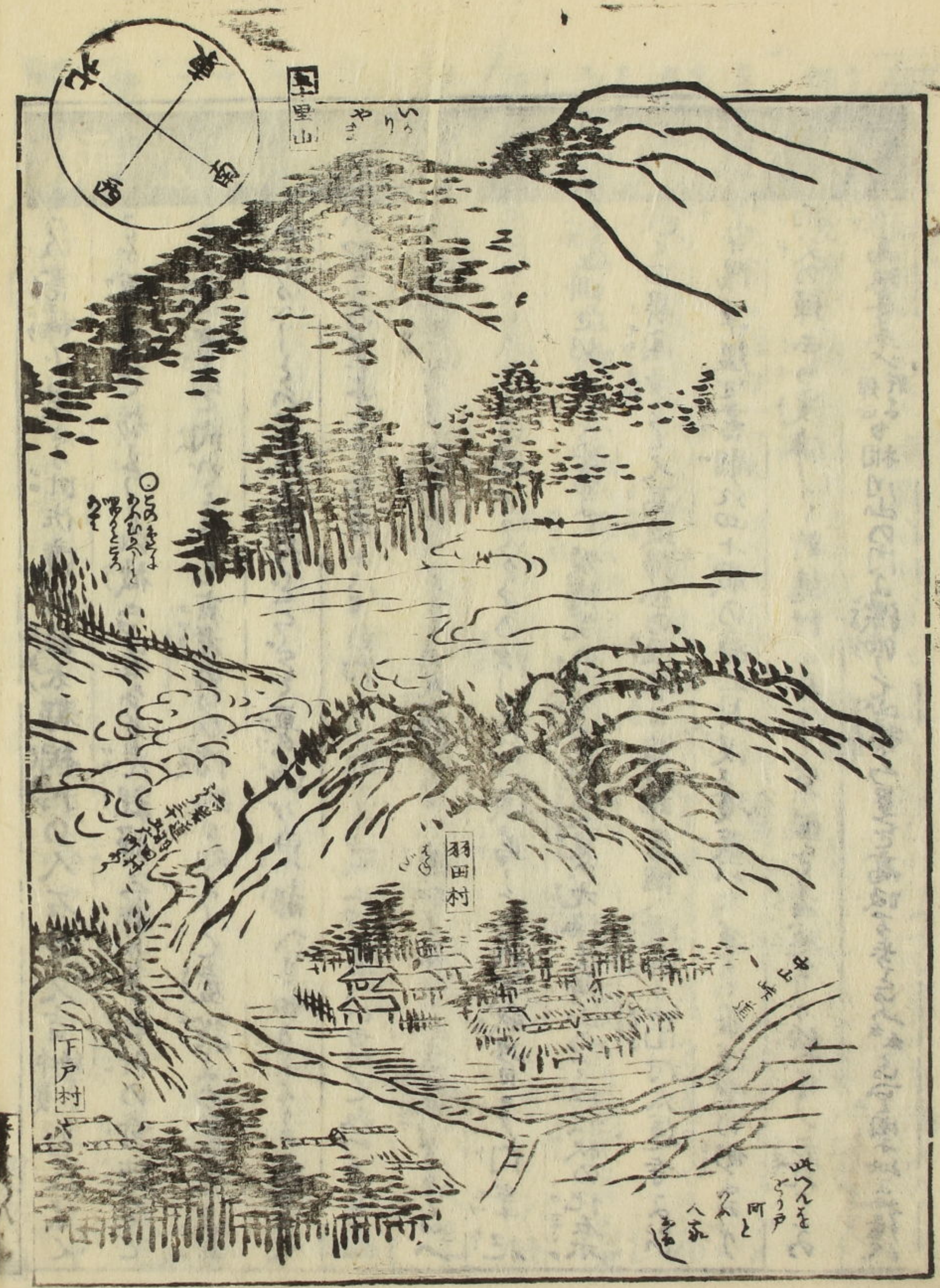


三ツ山の石とて
 精進の山とて
 三ツ山の石とて
 精進の山とて
 三ツ山の石とて
 精進の山とて

三ツ山
 三ツ山の石とて
 精進の山とて
 三ツ山の石とて
 精進の山とて

此一版文化己巳秋九月十八日
 於三岩山中平夏繪所圖也同年
 十月廿二日東家君命撰寫之

江戸 十三重屋



三ツ山
 三ツ山の石とて
 精進の山とて

三ツ山
 三ツ山の石とて
 精進の山とて

三ツ山
 三ツ山の石とて
 精進の山とて

三ツ山
 三ツ山の石とて
 精進の山とて

三ツ山
 三ツ山の石とて
 精進の山とて

三ツ山
 三ツ山の石とて
 精進の山とて

三ツ山
 三ツ山の石とて
 精進の山とて



雨
 内
 已
 霽
 雨
 暘
 榮
 居
 以
 哉
 風
 炎

兩
 巖
 雙
 立
 高
 共
 數
 仞
 其
 松
 柏
 森
 然
 云

西
 關

依後之執事なるは狸貉の人は憑りてありは丈嶋は狸貉の人は山猫の人は憑りてありては彼を訣ばられしりて補ふ物の患に造物者も全除んや
つらなり(一) 此れ世のあまじし鎌倉の何れの院の使僧とて伊豆駿河
の洞を秀猿とて傳ありりりての傳画をうけんとて材夫山妻られを求むりか
はありて遂に沼津に至りて物よ嚙とてみと人かどうなるの氣をいふ
狸の怪も化とて件の狸が画にたりて病の画を治すある某甲が病も治す
とれをうらふと病の柿の實を樹の園に種まひて種を樹とてうらふ
とてとて鳥よ寄りてとひりりりて笑ふべしとて狸のその效の拙くは物よ及
びとて種とて穴を共うとて水うけのうらむとて種とて葉め初るるよとてあたとを
うらむりりれ(一) 日本紀 聖仁紀 云昔丹波國桑田村有
以名曰癩襲則癩襲家有犬名曰足往是犬昨山獸
獵年士那而殺之則獸腹有八尺瓊勾玉因以獻之

是玉今有石上神宮也れは鄭答の牛馬に限らど六畜よまのや
のまのいとうりりれとてれは執事とて世俗のあまじし(一) 山崎の宇治なる上林
峯頂がたもとて鯛魚を調理とて腹を裂くとてその奥の腹の中は八尺す
周圍なる圓石にツヤありりり中山之柳子が隨筆よとてえとれは鄭答の更よ
もある破人との石痕癩石との病やるといへ小説よむめ(一) 楚王の妃の産す
しといふ識也石痕の類とてんべり六畜の玉を産すもその病のいとい
あるりもをりり雨を移しとて病あるり(一) 輾斜録卷はよとて物の産し玉を
狗宝といへは貉ももあるなり(一) 本草類目卷五十一 牛馬の力を考ゆ
再按亦また虎の田猫とてぬいぬい通ひさるといふ(一) 廣雅云狸
一一種面白而尾似牛故名玉面又名牛尾人常捕畜
之鼠皆帖伏不復出穴矣(一) 廣石川 物れは唐山とて狸を野猫と
異名とれどそのまの草野猫といふのあれは狸を田猫と訓一音をわらうと

江ぬれといふ田の田舎のまき野といふまき

周よりつらか常一黒猫^{ネコ}を畜^{カヒ}するその猫寛政七年乙卯十月

十八日は同郷の高森佐より獲^エたり^時は^ニ歳^ハう^ク荒^ヲを捕^トるその名を野驢^{ヤロ}

と名^ナつ文化二年乙丑、七月六日は老^コを^シり^ルが^カあ^ハり^ト十一年時

十三歳あり犬猫ハ五七歳まで繁^シるものあれど稀^ミなる長壽のものはあり

り至^シりぬる戊辰年五月は孩^{ガイ}児^ジが畜^{カヒ}たりしりく九月廿日はあて

花^ハを^シり^テし^テする^ハい^ハる^ハ生^イべ^カり^シは^メ女^メ児^スども^ガり^ク武^ブ火^クの^ク餌^エの^乾

し^テ子^コを^シり^テ八月月上旬は籠^{カゴ}の紙^{カミ}の掩^{オヒ}を^シり^テ遠^{トホ}く^テ火^ヒを^シり^テわ^ケて^メ

快晴の時ハ日は曝^{サツ}一夜ハ綿^{ワタ}は包^ツに^テ餅^エの^たう^のい^ハる^ハ餅^エを^シり^テお^レ

餅^エより五月中旬より六月の函^{ハコ}を^シり^テ七八九月と凡^{オモツ}六箇月ありしり

りあ^ハる^ハ人の^ヒ糞^{クノ}生^イも^のの^キ糞^ノの^シり^テ上^ウ壽^スを^シり^テ保^タむ^ハる^ハ寒^{サム}暑^{アツ}の^ハあ^ハり

らる^ハと^シる^ハあ^ハり

奇異

古今俗奇と好^{コト}するもの稀^{コト}なるれども北越^{ホクエツ}の七奇異南海^{ナンカイ}の平^{ヘイ}奇^キ

海^{ウミ}の不知^{シラヌ}火^ヒ関^{セキ}東^{トウ}の富士^{フジ}の農^{ノウ}男^ヲあ^ハり^テ常^{トコ}より^モ就^ツに^キゆ^ハる^ハ奇^キ

ありとあ^ハり^テ奇^キと^シて^ハ人^{ヒト}狗^{イヌ}の^ナ長^{ナガ}鳴^{ナギ}鶏^{トリ}の^ヨ骨^{ホネ}鳴^{ナギ}鳥^{カラス}の^ウら^ハる^ハ奇^キ

睡^{スミ}を^シ不^フ祥^{シャウ}と^シ衣^{キヌ}は^ヒ赤^{アカ}鳥^{トリ}の^フ糞^{フン}を^シ飛^{カケ}られ^テ帯^{オビ}の^ウら^ハる^ハ奇^キ

を^シ初^{ハジメ}と^シ吉^{キチ}祥^{シャウ}と^シく^ハその^ニ不^フ祥^{シャウ}あ^ハり^テも^モ悪^{アク}く^ハ不^フ祥^{シャウ}と^シる^ハあ^ハり^テ遂^{スエ}に^ニ凶^{クウ}事^ジを^シ

招^{マネ}は^ルその^ニ吉^{キチ}祥^{シャウ}あ^ハり^テも^モ初^{ハジメ}と^シる^ハ吉^{キチ}祥^{シャウ}と^シる^ハあ^ハり^テ終^{ツヒ}に^ニ士^シを^シり^テ手^テを^シり^テ

ら^ハる^ハを^シ辨^ハん^ハと^シる^ハ怪^{クワイ}い^ハ時^{トキ}あ^ハり^テ吉^{キチ}時^{トキ}あ^ハり^テ凶^{クウ}又^{マタ}士^シも^モあ^ハり^テ凶^{クウ}あ^ハり^テあ^ハり

の^ウら^ハる^ハ○^キ善^{ゼン}舞^{マシ}の時^{トキ}鳳^{ホウ}凰^ウ未^ミ儀^ギと^シ玉^{タマ}恭^{キョウ}か^ハ時^{トキ}亦^{マタ}鳳^{ホウ}凰^ウあり^テ正^{セイ}陽^{ヨウ}の^ウら^ハる^ハ止^ト

夫^フ妻^{ツメ}の^ウ徳^{トク}を^シ善^{ゼン}か^ハり^テあ^ハり^テ鳳^{ホウ}凰^ウの^ウ靈^{レイ}瑞^{ズイ}の^ウら^ハる^ハ玉^{タマ}恭^{キョウ}か^ハる^ハ暮^モ

く^ハあ^ハり^テ鳳^{ホウ}凰^ウの^ウ兇^{ケウ}惡^ウの^ウら^ハる^ハ○^キ周^{シュウ}武^ブ王^ウの^ウ九^ク年^{ネン}は^シ武^ブ王^ウ紂^{シュウ}を^シ伐^{バツ}んと^シ

盟^{メイ}津^{ジン}よ^リ武^ブ王^ウの^ウ河^カを^シ渡^{ワタ}り^テ中^{チュウ}流^{リウ}を^シり^テ魚^{イサ}躍^{エツ}る^ハ王^ウの^ウ舟^{フネ}よ^リあ^ハり

雄の如く 今様よりこれ勝鳥なるん源頼朝書云巴蜀異物志云ト並ぶるの処慎然

らば仍祈禱と云ふは是れは五月廿八日と経緯富士の時倉より

祐成時致ホも伐るの象と云ひらん致られらぬ和漢その不祥なるト

近湯吃の仁平年間内裡は怪鳥あり源頼朝政朝臣勅を奉るを射

たりとれ保えの乱あらんとするの象ともいなり 後醍醐帝の建武元年

亦内裡は怪鳥あり隱岐二帝左衛門尉廣有られを射りて南北朝と

とありて○百練銃ニ云ク天一延二年四月一日南殿母屋柱

如レ牛云云これとの年十月廿八日武徳殿焼亡の象ともいなり致東

鑑建曆二年四月六日將軍家 御病悵而小御所

東面於柱根花開られと六箇年を經る義久元年正月廿七日の

夜實朝ハ公曉ニ害せられありりれは祥ふありと非常の花

室候の如く亦是草木の咲なりやと云ふは是れは餘の奇異といふもあ

千百が一を録し天変地妖も時あり奇りるるをい人の子と思

曰。至誠之道可以前知國家將興必有預祥國家將

亡必有妖孽見乎蓍龜動乎四體禍福將至善必先

知レ之不善必先知レ之故至誠如レ神うばる人先預祥あり

善をさすものありん先妖孽ありし悪をさすものありん禍福

吉凶のつらう招くものありん善人もこれをさす悪人もこれをさす致正人の

邪を致す怪をんても怪は史記に宋景公三箇の善言よりて災

二度を後とつるこれ至誠の致と云ふ致もれども災惑ハ宋景公と

まはるる災は原是宋景公招くところ天変地妖をさすに至るる景公を

まはるる善も人もまはるる後をさすものありん速るる殺その過を悔行を改め

徳を修めて善を積ぶ災惑二度を後とすも宋景公禍あるべし其を

うる世俗の奇を好むなり一小奇異をさすれば大息驚嘆疑心瑞鬼を

生トて一犬形ヲ吠ルバ群犬ハ声ヲ吼一時草鞋大王をよびて竹の蓋ヲお
らん正人の怪をらんばをさるるその怪散らる終に怪あり

四 縣神子

縣神子ハ和名致ニ載ズル今俗ハらんを梓神子亦市子と云ハ檀弓の
義歿市ハるは縣といふが如しとの巫唐山ハ漢の時既ニあり王充論衡云
世間死ス者今生ル人珍而用之言及巫叩え一絃下上死人
魂因巫ロ一談皆誇誕之言也 見手卷三
之十六張

五 塞翁馬

塞翁ハ馬ノ故事ハ淮南子ノ人間訓より抄るるのあり
まは世書より牛馬をりて對しん王充論衡よりその牛ヲ載る馬を收免
むとこれより後の類書小説より馬を載る牛を收免むるをりて世乃
董子亦塞翁が故事より對あはをりて其歌いと遺恨の之今童蒙の

乃々本文を抄録して王充ハ全く列子よりなり列子卷八説符の編を并えん
淮南子南陽烈解云昔者宋一人好善者解按論衡作宋
家無故而黑牛生白犢以問先生論衡先生為孔子以下效之先生曰此
吉祥以對復鬼神註先生凡先生生也白犢純色也居一年其父無
故而育牛又復生白犢解按論衡其父復使其子以問先生
生其子曰前聽先生言而失明今又復問之奈何其
父曰聖人之言先忤而後合其事未究固試往復問
之解按論衡者無其子其子又復問先生先生曰此吉祥也復
以饗鬼神歸致余其父其父曰行先生之言論衡孔子曰此
神復以牛居一年其子又無故而育其後楚攻宋圍其城
當此一時易子而食折骸而炊丁壯者死老病
童兒上城守而不下楚王大怒城已破諸城守者

啓オフル 今按楚攻宋之事有焉トテ 而屠城之事無焉トテ 此獨以父子盲之故得

無キカラ 衆城軍罷圍解則父子俱視メテ 夫禍福之轉而

相シテ 生スル 其變難見也トテ 近塞上之人有善術者馬無故亡

而入リテ 胡ク 人皆呼之其父曰コト 此何遠不為福乎居數

月トテ 其馬將胡駿馬而歸人皆賀之其父曰コト 此何遠不

能ス 為禍乎家富良馬其子好騎墮而折其髀人皆呼

之コト 其父曰コト 此何遠不為福乎居一年胡人大入塞下

壯ク 者引絃而戰近塞之人死者十九此獨以跛之故

父子相保故福之為禍禍之為福化不可極深不可

測也トテ 見千葉卷十 八八回訓 曲亭子云吉凶の如トテ 糾纏福も福も禍も禍もあらず人而暮

事塞翁馬推枕軒中聽雨眠との詩を吟とる云々の行を

カシマ アルニヨ コウニク 詩の序を引き塞翁姓ハ李ナリ

信トテ のやと原寓言より塞ハ北ありより我我よりそのあさひの

王トテ 瑤囊抄云 後鳥羽院義久の乱より隠岐國へ送されり

述懐の御製 トテ 北の將がことこをのこりて

餘塞翁を詠フ 秋夫木鳥のあり又世俗の誘トテ 禍も二年のり

蓋トテ よりつものも塞翁が故よりせり塞翁の倚伏を識りぬ

下部の小説を作人同栄枯得失の理を述へんその公稱又揚トテ 證

多トテ 此の書のあり 醍醐隨筆に平治の敗軍は頼朝の父義朝は後世を擣

多トテ じの函に似せり我共を起し平族を慶み天下の權を執り至てハ

吉多その中より義理西海の軍功拔君なるハ吉多なれども教

又贈とく身を要トテ るものなるゆへにそのゆへに握原が君恩を

天小名は倚重されし吉多は似せりも三族を夷らるに至りては

その中よりわれをその氏朝敵とすりて義貞より負鎌倉まで
前西國の果より没落したる凶事似れども天下の武將と仰ま
千四代の基成守れよとありて吉中その中よりわれを吉凶と
常よその身は相依るとりてふまは違ふらざるべしとて今按じらる
孫子よわの福艾の相をえらむとていふもそのさう同じ福の家の如く
老あり福相壽相の大將の百戦を控てやそなびその牙失は傷らる
いとも恙あて功をえざるなり所謂塞公孫の福艾の相ありの致人の骨
相の一日の天象は晴雨あるが如く人間の生涯を一十日とてよく辨論す
るとは初凶ありて後吉なりとありて朝は曇り夕は晴るが如く初吉あり
と後凶ありて遇ふ人の朝は晴る夕は雨ぬるが如く又富貴のあり生れて
丁生と異なる人の且より暮より快晴ある日のとて貧乏の病も生れて
生涯患苦も沈淪とる人の且より暮より風雨止むるが如く初吉ありて後凶あり

も人よりその吉凶は初中後を道の博士よ為ねるなり○亦按じらる
淮南子の塞公孫が馬のふらむ根たつた致莊子よの壁を牛馬と
とまより齊物論天地一指也。萬物一馬也。又應帝王篇
一以己為馬。一以己為牛。とての類とれとる餘枚拳は違
ありん

六 相撲取黒船

大森杖信とりみ人の隨筆をえりて元文のころ物とをなほ黒船と呼
る相撲とり京都河下立賣橋の欄干は益々く死より又辞世の
和歌ありてめせげどもせざるゆひがあらひてせひあり新よあり
わの剛強をとりとするもの、辞世の歌を迷せりといふことあり
とて婦人の仁も仁多めたる勝べく匹夫の勇も勇多めたる勝べく恥を
るとは非命の死も可なり只教あるありとて迷ひ解ざるの原本あり

年月日時を記したりしが忘るるを操狂言の作者が思ふに
と作らざらんか

七 西鶴 羽川珍重

西鶴ハ井原氏あり年未ひさしく大阪澹所に住りて
難波鶴難波
非謬ハ宗因門人あり松壽軒と号し亦難波俳林と稱し
最上の意々長点以下つ子の如く物見車よ
一人肚裏よ一字の文を
高どりその書ハ男色大鑑西鶴織留せ胸胸集用一月玉洋日本
永代鑑西鶴置土産西鶴彼岸樓西鶴名残友の餘りくむる
なりんと今日同業よりとを述す滑稽を盡す西鶴より
とされし遊廓のうらみと怒りてその書櫻難
とて世の識知の脱れぬ身よりて後後撰陽の梅園堂が諸藝太

平記 金本八世元祿十五年三月刊布

とありの西鶴が地獄めぐるといふ書を作を設
甚しく嘲哂してたりあるれどもその書をなれば西鶴よりさるる遠
よりとありの遊仙窟の作者張文成ハ名を猿馬といひて唐の玄宗の時
開えのてゝの今本傳又文章猥褻うらみ君子のるは取らざるとい
と 日本入りの文を伝重一金帛をりて購求す四角のり
るもの静斎隨筆よもこのころを論じて本傳よりるどく文辭
浮艶鄙猥るりゆきまや今の世は行を詩文一編あり文士の戒いべ
たることあり青錢學士とくその文萬選萬中とて當時は譽を
たる文成より後世は論定をてのやのうて戯謔もよよりあるは
里洞房の癡情をの親しくたちあるまのあふくともまをたのめ
と筆よりくその趣を盡すとてハ作者の公ぶる由推量られ徳を傷
りたるる大約元祿年間の戯編をなれば俳諧師の作戯ハ

か大鑑^{カキタマシ}西已^{ニシ}厄言^{イカヒ} 眞山^{マコノ}貞^{サダ} 路身水^{ロシノミヅ}が丹前^{ニシマキ}艶男^{エンヲ} 其角^{シカク}が五十四^{イソトヨ}君^{キミ} 四^ヨ志^シ屋^ヤと
ま^マま^マま^マの^ノ續^{ツグ}像^{ゾウ}を^ヲ 團水^{ダンスイ}が男女^{ナンニヨ}色^{イロ}競^{ケイ}馬^バ五^イ團^{ダン}が京^{キョウ}童^{ドウ} 以下^{イカ}載^カ作^サ 不^フ角^{カク}が古^コ鹿^カ了^{リョウ}ホ
菱^{シズ}川^{カハ}師^シ宜^イが等^{トウ} 枚^ヘ舉^キよ^ヨ違^ヒめ^メら^ラと^ト又^{マタ}俳^{ハイ}諧^{サイ}所^{ショ}ら^ラと^ト由^ユ於^オ於^オ於^オ本^{ホン}昌^{チャウ}三^{サン} 浅^{セン}井^イ了^{リョウ}意^イ錦^{キン}文^{ブン}流^{リウ}
枚^ヘ舉^キよ^ヨ違^ヒめ^メら^ラと^ト又^{マタ}俳^{ハイ}諧^{サイ}所^{ショ}ら^ラと^ト由^ユ於^オ於^オ於^オ本^{ホン}昌^{チャウ}三^{サン} 浅^{セン}井^イ了^{リョウ}意^イ錦^{キン}文^{ブン}流^{リウ}
後^{ノチ}著^{シユ}述^{ショ}駁^{ハク}の^ノれ^レと^トも^モ 裁^{サイ}作^{サク}の^ノ才^{サイ}ハ^ハ西^{セイ}鶴^{カク}殊^{ジュ}は^ハ勝^{シヨウ}乃^ノを^ヲ但^{タダ}その^ノ文^{ブン}ハ^ハ物^{モノ}を^ヲ
賦^ヒの^ノも^モう^ウと^ト一^ニ部^ブの^ノ趣^{ソウ}向^{キョウ}を^ヲ一^ニ八^{ハチ}文字^{モンジ}舎^カ自^ジ笑^ウ 江^エ嶋^{シマ}屋^ヤ其^キ碩^{シツ}西^{セイ}澤^{タク}一^ニ
風^{フウ}ホ^ホ至^シる^ル西^{セイ}鶴^{カク}が^ガ筆^{ヒツ}意^イは^ハ做^{シヨウ}ひ^ヒられ^レを^ヲ潤^{ジュン}色^{シキ}一^ニ部^ブの^ノ趣^{ソウ}向^{キョウ}を^ヲ一^ニ
乃^ノも^モあれ^レど^ドや^ヤう^ウく^ク浮^フ艶^{エン}鄙^ヒ撰^{セン}う^ウく^ク 依^イ客^{カク}老^{ラウ}圃^ボの^ノ願^{ガン}を^ヲ解^ゲせ^セう^ウは^ハら^ラと^ト
ら^ラも^モその^ノを^ヲ操^{ソウ}せ^セり^リ 調^{テウ}高^{カウ}た^タれば^バ賣^ウま^マと^ト賣^ウま^マとい^ハい^ハめ^メら^ラる^ル 西^{セイ}鶴^{カク}ハ^ハ俳^{ハイ}諧^{サイ}
所^{ショ}あれ^レとも^モ世^セ俗^{ゾク}の^ノ口^ク吟^{イン}と^トす^ス 獲^{ワク}句^ク絶^{ツツ}え^エる^ル 雅^ヤ俗^{ゾク}雲^{ウン}壤^{リョウ}の^ノ差^サを^ヲあれ^レど^ド
張^{チヤウ}文^{ブン}亦^{オク}が^ガ詩^シ文^{ブン}章^{チャウ}の^ノ後^{ノチ}世^セは^ハ行^{ユウ}れ^レら^ラと^トい^ハへ^ハん^ン 秋^{アキ}西^{セイ}鶴^{カク}ハ^ハえ^エ禄^{ロク}六^{ロク}年^{ネン}
癸^ミ酉^ウ八^{ハチ}月^{ゲツ}十^{ジュウ}日^{ニチ}は^ハ没^{ボツ}せ^セる^ル 年^{ネン}五^ゴ十二^{ジュニ}墳^{フン}墓^ボハ^ハ大^{ダイ}阪^{ハン}八^{ハチ}所^{ショ}目^メ寺^ジ町^{チヨウ}哲^{テツ}言^{ゴン}願^{ガン}寺^ジ本^{ホン}
堂^{ドウ}の^ノ西^{セイ}の^ノ背^セ壇^{タン}南^{ナン}側^{セツ}之^ノ側^{セツ}目^メの中^{チュウ}程^{ケイ}あり^リ 墓^ボ碑^ヒハ^ハ仙^{セン}皓^{コウ}西^{セイ}鶴^{カク}と^ト大^{ダイ}書^{ショ}一^ニ
え^エ禄^{ロク}六^{ロク}年^{ネン}云^{クニ}云^{クニ}下^ゲ山^{サン}鶴^{カク}平^{ヘイ}北^{キョク}條^{テウ}團^{ダン}水^{スイ}建^{ケン}と^ト左^サ右^ウに^ニ彫^{テウ}刻^{コク}せ^セり^リ 鶴^{カク}平^{ヘイ}水^{スイ}
ハ^ハ世^セ務^ボが^ガ才^{サイ}子^シと^ト團^{ダン}水^{スイ}ハ^ハ西^{セイ}鶴^{カク}が^ガ没^{ボツ}後^{ノチ}京^{キョウ}より^リ浪^{ナミ}花^ハは^ハま^マる^ル 七^{シチ}年^{ネン}その^ノ墓^ボ
菴^{アン}を^ヲ成^{セイ}ら^ラう^ウと^ト名^ナ残^{ゼン}友^{ユウ}の^ノ序^{シヨ}より^リえ^エた^タる^ル 亦^{オク}世^セ務^ボ彼^ヒ菴^{アン}と^トり^リ冊^{ソク}子^シ
よ^ヨその^ノ肖像^{シヨウゾウ}を^ヲ画^{ガク}ハ^ハ辞^ジ世^セの^ノ没^{ボツ}を^ヲ題^{タイ}せ^セり^リを^ヲ墓^ボ寫^{シャ}と^トし^シ予^ヨが^ガ好^{コウ}みの^ノ
一^ニ癖^{ヘキ}の^ノも^モ件^{ケン}の^ノ冊^{ソク}子^シハ^ハ西^{セイ}鶴^{カク}が^ガ送^{ソウ}菴^{アン}を^ヲ江^エ戸^コの^ノ書^{ショ}林^{リン}志^シ村^{ムラ}孫^{ソノ}と^トい^ハふ
の^ノ浪^{ナミ}速^{ソク}の^ノ書^{ショ}肆^シは^ハ就^{ジュ}る^ルと^トえ^エる^ル 禄^{ロク}七^{シチ}年^{ネン}甲^{ケツ}戌^{シュ}の^ノ二^ニ月^{ゲツ}下^ゲ旬^{ジュン}に^ニ彼^ヒ菴^{アン}
樓^{ロウ}と^ト名^ナけ^ケら^ラる^ル 發^{ハツ}行^{キョウ}せ^セる^ルより^リ 志^シ水^{スイ}が^ガり^リあ^アら^ラる^ル 書^{ショ}肆^シが^ガ後^{ノチ}序^{シヨ}より^リえ^エる^ル
也^ヤハ^ハ肖像^{シヨウゾウ}を^ヲる^ルべ^ベく^ク又^{マタ}巻^{マキ}尾^ビは^ハ如^ニ負^ヒ 幸^{コウ}方^{ホウ} 萬^{マン}海^{カイ}信^{シン}德^{トク} 才^{サイ}丸^ワ志^シ水^{スイ}が^ガ追^{ツイ}善^{ゼン}
の^ノ發^{ハツ}令^{レイ}を^ヲ載^{サイ}し^シ 江^エ戸^コ俳^{ハイ}諧^{サイ}所^{ショ}不^フ知^チ作^{サク}者^{シャ}と^ト題^{タイ}して^シ 八^{ハチ}句^クを^ヲ附^フ録^{ロク}せ^セり^リ
戸^コの^ノ書^{ショ}肆^シが^ガる^ルく^クと^ト送^{ソウ}稿^{コウ}を^ヲを^ヲ板^{バン}せ^セり^リ 當^{トウ}時^ジ西^{セイ}鶴^{カク}が^ガ裁^{サイ}作^{サク}の^ノ
世^セは^ハ行^{ユウ}れ^レら^ラる^ル 作者^{サクシャ}ハ^ハ名^ナの^ノり^リ 書^{ショ}肆^シハ^ハ利^リの^ノり^リ 世^セも^モ
一^ニ時^ジより^リ 世^セも^モ亦^{オク}一^ニ時^ジなり^リ

西鶴

この肖像の鶴ひらき桜の園を暮寫



難波桃林

招き行

西巻

福世
人の子守

そらへんあま

あまのり

あまのり

遠江のついでに

元禄六年付廿廿二番

○羽川珍重の武藏國埼玉郡川口村の人也三同と号本姓の真中氏俗

祿を大田辨五郎といふ大田の川口の舊名也重のその画名を父の

諱の直知子か祖父のたけの叔父の弱官より江戸より来りて画を

まらびえ祖身居清信を師とて後羽川下総國葛飾郡川津向の御士孫

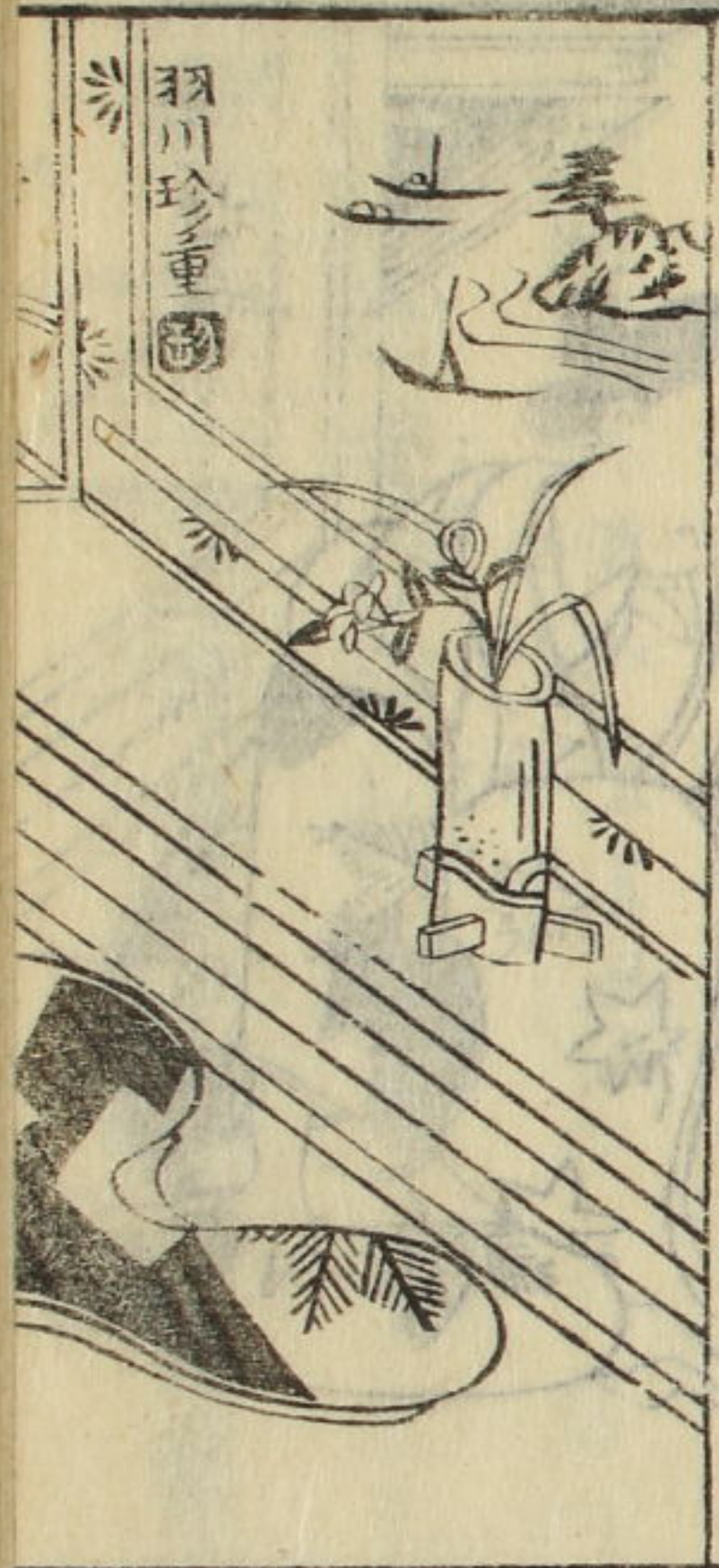
浪氏の家より往來孫浪氏が妻ハ生涯娶らざ仕られども武を捨

て只画をりて旦暮と給し享保に至るとまらび行りて海節用

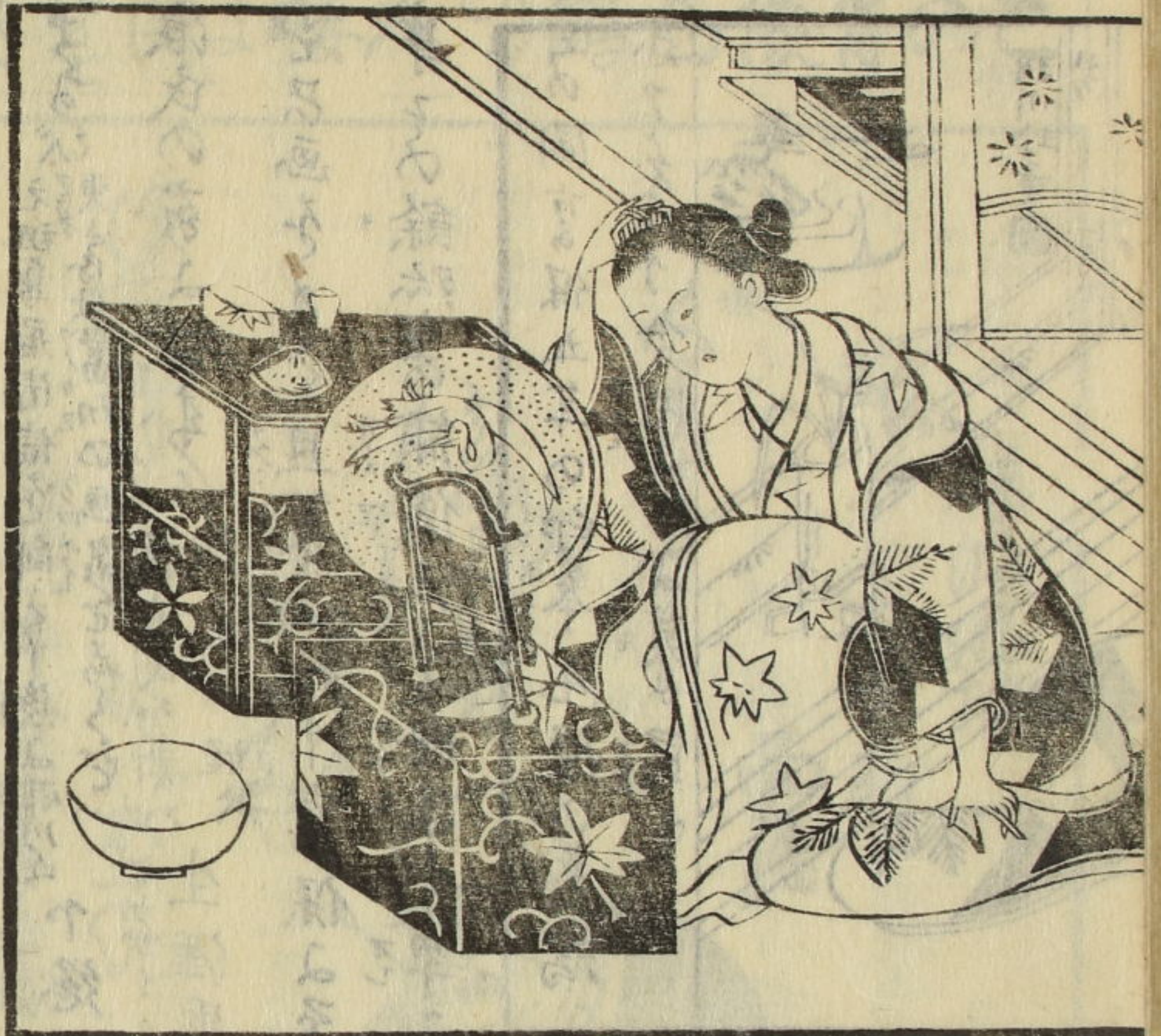
身その餘珍重の肖像をる冊子今罕く見ゆ老實ありて言行

この園を保五年の印本丸鑑の巻端

ふらんをたり今因らば莫く寫也



まらび稀なる人物なりといふ人
嘆賞せらるるありといふれ、手あ
あらん書肆某甲珍重了



いと答へそのらる画よあまざる自利の形よ筆をとるまゝと
 志画よわの月ハ歌舞伎の画者板といふも辞やまらるりしを晩
 年よ及く自画の繪馬を故御川口ある稲荷五社へ奉納し又まら

いりまら今より衣食住を
 五尺橋よりまらるる近隣に
 うり蔵板の繪本と画に
 ありれりしを可憐に誘ひ
 貳重絶つうけりしど負士の
 常へ人よ惠を受つるのり人
 をあそぶまれの五斗米の形よ
 櫻を折る玉を願ひて
 少よはを鯛んとて奉をすへ

肖像を画れ小引一卷を自記しと嫡姪恒直が二郎よりはたは画
 像と小引の定よ係りて焼亡し繪馬の今よありしりみ為重既老衰
 一とまらる三同宣觀居士と法号し宝曆四年七月廿二日川津前
 の御孫浪氏のおよ病死を辞せしなりひのりり為重今一葉の
 享年七十餘歳江戸下谷池の瑞東圓禪寺に葬るる

羽川珠重家譜

堅光 慶長十七年壬子十一月四日没

堅重 寛永十二年乙亥十一月十一日没

利直 寛文十年庚戌二月二十二日没

三同 直知季子画名

寶詔教

俗間の童子あは讀あらしむる宝詔教といふもの空海の作する

堅統 寛永四年丁卯八月二十一日先父而没

直知 享保三年戊戌四月朔日没

説あれども性灵集などより似るべくもあらずと云ふは抄見のあれが弘法の
系を定稿するに法師の綴りたるんされたる書の世を行れり人
膾炙するものありたるものより長門卒の平家物語八の上冊
心変みなりといふ所よりえらうと抄録

山門公書りしりれば南都の大衆坐主經一卷実語教一卷を作
根本中堂又送置云云
首尾

實語教とて之巻

ありのてまのつてんの室
恥さられ萬代のさ
徳とされ一生のさ
四大日とすり抄とるん
わがゆゑの書を讀むる書

眠を除く夜弁を好む
四所の船よりのうど
神よあつとつとも恐れど
神君よあつとつとも恐れど
又母常よりむりつて
多きおののぶよりん
是學問のさあなる
一兼佛よりなるのりて
二官よりつと名づけ
三井の堂舎を焼て
四海よあつとつと
又さよはつとつと

飢を免むく味を構
海陸の道を得
舟よあつとつとも
木石よ異なる
あほ一畜生よ
妻子よさうなる
命終るとも忘却する
一文不通のた
二めあつとつと
三つのはつとつと
四つとつと
五道生死のつとつと

六らんびくのすげんま

七社の神輿をめぐると

八重のさくらをみる

九重のさくらをみる

十種供養のさくら

石燈のさくら

命項禮平の軍

生かすはげなま

又ぬきかき一首

心法解のさくらをみる

らんげの位入道 権政 山門菊の大家をみる

ひらきせり 移る奈良法所 示憤りて 嘲呼をみる

終るしうのさくらをみる

平盤表記のさくらをみる

関のさくら 王亮論衡 卷十二 程材篇 第九行 文吏幼

則筆墨手習 云云と見え 又源氏物語のさくら 往昔

私由漢のさくらをみる

入木道など 唱るのさくらをみる

我末也 我末也

我末也 未末不々 和漢暗合の對する 類書纂要 卷二 云昔抗

城 有 一 猾 賊 每 盜 入 家 物 去 必 用 粉 書 其 門 曰 我 末

也 一 至 其 所 患 者 多 官 府 莫 能 論 捕 忽 于 復 卒 獲

之 下 獄 賊 狂 獄 久 厚 結 納 獄 卒 每 殺 獄 卒 某 處 埋 有

六波羅のさくら

七道諸國のさくら

八講のさくら

公卿のさくら

十方のさくら

お供養のさくら

臆病のさくら

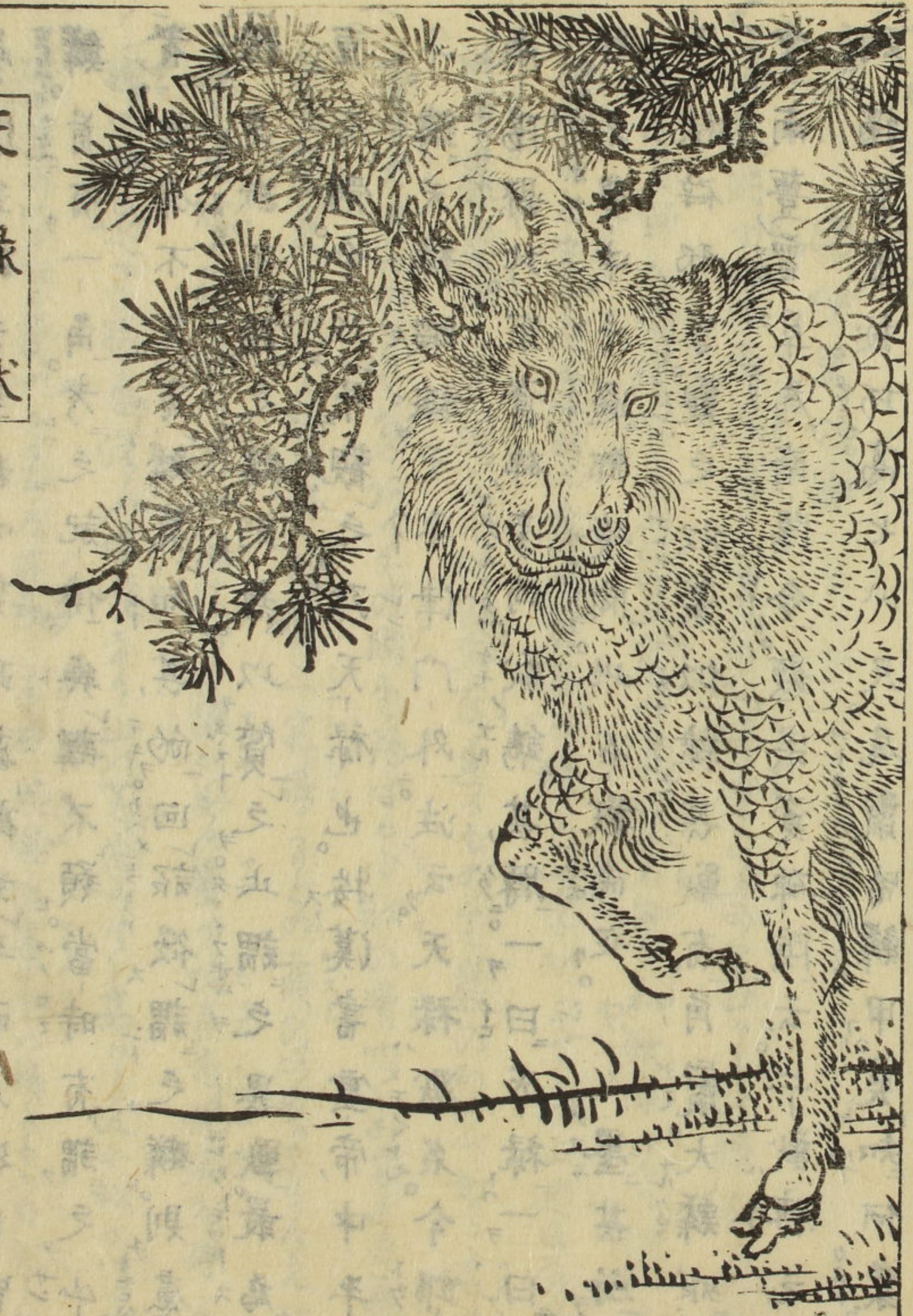
在る所のさくら

金一室若于一卒。如其言果獲遂得金市。肉與之醋飲。詭之曰。今夕少寬片時。与子出獄。五鼓便歸。決不相累。卒聞言愕然。但受其賍。不當阻也。得寬縱之。遂踰牆而出。逼城復被盜。其門各書曰。我末也。至五鼓果回獄中。卒見賊歸大喜。賊曰。我生笑。明日有司以圖刺。史曰。我末也。尚在。何將此人。抵死遂加以犯夜之罪。釋之。以見知。猾賊之志之狡也。らるる原小説より出た。手積書纂要へ引くところの書名を挙げられ。明人の癖なり。且その書より小説を收むるをりを行れざる。故亦東鑑。天福二年二月十日。記云。去二月。比南都。天一狗。現。惟一夜中。於人。家。十餘。守。書。三字。未。未。不。云。非。短。慮。之。所。覃。尤。為。奇。惟。曲。真。字。云。唐山抗城の賊。ハ人家の門。に我末也と書。天朝南都の賊。種ハ人の戸。毎。未。未。不。と書。と天北の岡。り。が。れ。の。処。より。對。る。多。く。あり。す。り。と。さ。よ。記。し。り。

⑩ 天祿獸

天祿辟邪ハ靈獸なり。其角の二ツあり。を天祿と。角の二ツあり。を辟邪と。と孟康ハ。つ。を王者の通飾。と。な。ら。ん。と。云。天。り。は。福。を。り。ん。と。い。ふ。説。と。是。ハ。沈。約。天朝。田融院即位元年。天祿と改られたる。よ。や。天祿。の。い。ハ。天。鹿。と。作。る。唐。山。の。も。も。の。形。状。定。り。な。ら。ず。也。は。故。楊。用。修。ハ。亦。云。り。と。蝦。蟄。の。方。れ。る。の。の。と。を。い。は。す。今。も。稀。し。其。の。圖。を。り。ん。と。云。頭。ハ。獅。子。と。似。く。角。二。ツ。あり。身。ハ。豕。と。類。し。肉。甲。あり。られ。も。又。楊。色。り。天。祿。を。牛。と。類。し。牛。より。も。大。き。く。一。角。あり。大。き。く。大。き。く。鮮。め。を。予。と。め。く。入。る。お。わ。り。と。り。き。金。子。老。人。の。筆。を。借。り。新。よ。その。圖。を。け。く。を。併。し。く。右。記。を。攷。證。と。或。ハ。れ。は。喪。哉。ら。ん。り。と。云。録。し。て。り。す。博。物。の。君。と。笑。の。り。

天
禄
獸



漢筆說云至和中外交趾獻麟如牛而大通身皆大
 麟首有一角考之記傳與麟不類當時有謂之小犀
 者然犀不言有麟莫知其的カハメヨリ回詔彼謂之麟則慮夷
 獠見欺不謂之麟則無以質之テヌス止謂之異獸最為慎
 重有體今以予觀之殆天祿也按漢書靈帝中平三
 年鑄天祿螭于平津門外注云天祿獸名今鄧州
 南陽縣北宗資碑旁兩獸鑄其膊一曰天祿一曰辟
 邪ゲンホヤ元豐中予過鄧境問此石獸尚在使人墨其所刻
 天祿辟邪字觀之似篆似隸其獸有角鬣大麟如手
 掌南豐曹阜為南陽令題宗資碑陰云二獸膊之所
 刻獨在製極巧高七八尺尾鬣皆鱗甲莫知何象而
 名此也今詳其狀甚類交趾所獻異獸知其必天祿
 也亦載說類

⑤ 伊豆の海

伊豆國小田の溪大浦より入りて味山と云ふを以て北條家の守將
 洋之上野の跡と云ふ所の山究めて好景あり和歌浦見ヶ淵の茶屋
 ケ茶ると字一なる処ありその茶屋が味と唱ふ処より海上通よりいれ
 奇巖突出して項々小松の生茂なるもの至巖のあつちあり處とな
 り大燈口のよとありその向を釣する小松の漕ゆくあをよ画く
 とも筆まゝ及びりてあべり大燈三宅傳りたる夜のひゆりらんえたる
 打つてはつとありて街中風怪あり廻りて響か呼声白帆張る舟人が
 棹の秋とて腸を流し佳境あり山の芝生より高くく小松がゆり臥
 たる夜のひゆるあべり石郎と石天峰の景迹の物も書記になれ
 ばの此は好く入るる人舟ゆたふ都の人より誇り付ゆれどその味山と

をさぐりてはあきく予曩又豆相の間を拵置り日浦突より小田
越くを相模灘二十餘里を航よりゆく程又その日亭午の比風の吹く
まじく之浪の濤へ漕ぎまじり人もそれ由航よりゆきて旅宿又逗留
し十七八所をめぐり官川と唱へ材のそめ処に文治年間鎌倉右
大將伊勢の官川の農家をうづらひてその名ありとりの農夫某甲
が家より親鸞上人の身づくろを名号とりの月のとががよど縁起の奇異
ありて次の日己の時ゆきてたれんとり此追風よりとありて航
のくまらとたより大傷をまらありて熱海伊東が磯をえりてま
るる海上一里をぐるをまられり端傷と唱へ小傷ありり漁戸僅
よ二十六水が外にたをす昔ハ伊東よりりの磯女端傷の漢夫と相馴
るりのあれば毎夜海上一里が程を洄死はわらふは夜後と脹るは
載り水を砕く登る登るの水は越る異なりて浮麻の髪を結び

の世の事ありては金子を擲りて身をほろけり都人よ此れハ
それら危死の怖く危るるに化るる程をうりとも法を輪標を破り
よあはれは波濤の上ゆくと安なるなり船中のつれづれなる物語をまらば
由耳あはれりなり伊豆の海より鯨鮪の浪より群衆の鯨鮪の潮をまらば
眼前よえてりなり伊豆の海より鯨鮪の浪より群衆の鯨鮪の潮をまらば
有りが常より水行するれり人もまらば煩いとまらばなりなりなりなり
若くは遠くは気色をたを舟人ホのかわきて江戸入るはめがらとて墨の
りなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなり
若くは遠くは気色をたを舟人ホのかわきて江戸入るはめがらとて墨の
らざん思れりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなり
しなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなり

馬河ウマカ悔カみたるの事コトよき事コトに又またされを誠マコトと戦たたかふありと云いふ也
一聖イシの教コトを忘わすれしものも愚オロシみれしものも膏ヨ成なりの時トキは田タ田タ一ヒト看ミ
ぬ小田コタの戸ドの港ミナトにあらば文字モジあり才サイ人ジンあり只ただ邊ヘリ鄙リヤウ良リヤウ師シ遇ユび書カキふ是
しは苦クあり此コノ彼カノ閻エノ君ミコも夜ヤ話ワタシする頃トキは九月クニノキのときなりされは大津オホツの
ふ鳥タケ氏ウヂの鹿カの声コエを居イるもひとも夜ヨにほつ猿サ藤トウの枕マクラを敷フき荒ア磯ソ
ら浪ナミの鼓ツ形カタ多タなりぬの琴コトもひとも腸ハラを割ワれとみなり置ツきぬ配ハイ本ホンの
月ツキをうつんとゆめを僻ヒガ言ゴト由ヨ世セを捨スてうらうらこのをいり田タ田タ一ヒトの田舎ノノ
ある蓮レン臺ダイ寺ジ村ムラは温ユ泉センあり近チカ属ゾク湯ユ本ホンは水ミヅを造ツクりつたりと醫イ賢ケン師シを養ヤシ
先マ人ヒトは誘イ引ヒれぬれぬ浴ユとさすその湯ユのささるるの湯ユもさす物モノなりと云いふ
塩シホ煮ニの芋イモ一種イツシュと根ネ根ネの妙ヒシは養ヤシへたりなりと云いふ殊ヘ々ヘ々ヘは辺ヘ鄙ヘありは
さしぬものもさし土ツチ人ヒト寒サム梅ウメと字ジさす田タ田タ一ヒトの山ヤマ中ナカは冬フユ花ハナさく梅ウメあり
藍アイ玉タマと云いふ妙ヒシは下シモ田タ田タ一ヒトの里サトに頼ヨリ政サマの室ムロ葛カ蒲フ前マエの石イシ墳フネあり崖サカ山ヤマの儒ニホ生セイ秋

山ヤマ氏ウヂの事コトを記キし墓ハカ碑ヒを建タテて本ホン城シロ後ノチも葛カ蒲フ前マエの石イシ墳フネありと云いふ也
後ノチ名ナ寄ヨりえたる葛カ蒲フ前マエの事コトも愚オロシ考カウありと今イマも教コト員インと云いふ長チカ鶴ツル石イシ身ミ
の眺ナヅカ望ボウは丹ニ後ノチの宮ミヤ津ツ久ク世セ後ノチの文モン殊ジュ堂ドウも似ニたりん故コトは石イシの形カタの立タチ指サシ
を象カタりたる名ナはつたりん今イマも尊サんまかされぬは二ニッツ損シたりと云いふ也
鳴ナ弘コウ法ホウ大ダイ師シの手テ取カりされは對タイと云いふ予サ曩キは墨イシ本ホン一ヒト幅フを購コウはと云いふ也
海ウミ邊ヘ土ツチ記キは照テラしみれば彼カ青アヲ嶋シマありと云いふ弘コウ法ホウの手テ取カり海ウミ嶋シマ風カゼ土ツチ記キ
は云いふ青アヲ嶋シマは方カタれぬは沈シヅみりたるはと云いふ沈シヅみの澤ワカと唱ナりぬる南ミナミの方カタは雲クモ青アヲ
の心ココロのりたる空ウツク海ウミの造ツクりたる辨ハ財サイ天テンを安ヤス置シと云いふその像ゾウゾウを誅チされは長チカ
一尺イツシツ有アル餘ヨリ幅フハ七シチ八ハチ寸スンありと云いふ厚コトを一寸イツセンありぬる古コ丸マル舟フネの物モノの表オモテは座ザ
像ゾウゾウの辨ハ天テン并ナヒは十五ジュウゴ童ドウ子シを彫ウツ刻キし裏ウラは手テを挿サシ入れぬは海ウミ邊ヘの指サシの小コ筋スジ
も鮮アサ明ヤカよりえたるその文モン字ジをの如カタくも安ヤス置シの末マタ歴レキハ詳シヨウありと云いふ也
之コノを如カタくも下シモの弥ヤ陀タハ海ウミ岸ガシの細ホソくも石イシの形カタありと云いふ也

青嶋天弘法形

天長二年七月七日

於江嶋辨天法

秘密護麻手 空海

一万座奉終行

以其灰此形像作者也



唱のよき身なり亦田井水りて海魚を畜ふ人ありりそその工夫をばく
 よ方二面をりたる生簀を造りてこれ潮を汲入る鯛鯉鮓鯽鯉
 といふの海魚をすりて毎日生簀の朝一柄を汲りて列二柄の井水

海魚を畜ふ人ありりそその工夫をばく
 よ方二面をりたる生簀を造りてこれ潮を汲入る鯛鯉鮓鯽鯉
 といふの海魚をすりて毎日生簀の朝一柄を汲りて列二柄の井水
 なる人そその智を用るよめりり亦大例の候材は向水麻あり枝
 葉を製しりてこれを煮れば海魚二度洗ふれば一枚の鯉ハ獲んば彼も陸居
 たるがら海底は物を求むその辛苦推して都會の人ハ寺堂一三百
 歳を費せば飽むとて鰓を食へる末を鋤り粒々皆辛苦成農夫の
 入をこのいふは漢者の苦勞も又あふなりこれらハ獲る常の事行さるる
 海 然るにたゞありて又横よりの洞ありこの常は洞中ハ潮涌て近
 せりこの処はふれハ大鯨を獲んと囊を揚り物を取らば如く大
 例は廿餘人の舟水麻のれど己をを汲りてとれその処へ入るもの只天の
 外に泡をりり中田入坂野積のいり東國の女を賣り男ハ息の短死
 りからんば若辛由とてとひせり豫樂は海士といふ樞曲を惟を

より腰が痛く入りくさくさのつと回が天姥山を越えんと答へると違ふわ

小鍋は大鍋のあつてもよと程き湯が湯のふと口はくちやく

梨本村に宿りつや田よりこまき五里とある日の高つれと天姥山六里を越

つたれが草鞋と足捨足濯がくや田より得つたもれるをこまきとて入

この処天姥山の麓より入るは十ラちをものへて飛鳥あり翠竹まげ猿

のむいよふくまる圓通堂ありそのほろつた墓所あり口入りとてまき物

つるぐ枕よとて虫の音のこ懸ひつた夜もあつた夜もあつた夜もあつた

お規音堂のつと紅の音とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

